
愛する者 愛される者 ~一幕~

スミトモ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

愛する者 愛される者 ～一幕～

【Nコード】

N9185N

【作者名】

スミトモ

【あらすじ】

信愛の奇人 ユラン＝ルカーンは、愛する姉を助ける為に、その人生を差し出した。

新米の刑事 スーマン＝クリストフは、自らの信じる正義の為に、その人生を差し出した。

彼等は互いに違う道を歩む者達。

子供と大人。

悪と解っていてその行動を冒す者と自らの信じる正義の為に行動を阻む者。

彼等は互いに違う道を歩む者。

されども彼等は、ほんに近しく、実に遠い二人だった。

プロローグ（前書き）

とある事情より書く事になった小説です。

恐らく誤字・脱字があります。

そして私の文章力はかなり低いです。

実に低いです。愚かしい程に低いです。多分。

そこをあえて胸に留めて、どうぞ楽しんで読んで頂けると私は喜びます。

プロローグ

ぼとり、ぼとり。

血が滴る音。跳ねることも無く、只紅い雫が落ちていく。

木製椅子に座った娘の綺麗な手の中指より垂れるその血に、彼は極上の快感を感じていた。

「 嗚呼、何故に私は到ったのか、解せぬ、解せぬ 」

自らの白い髪を、滴る音を紛らわす様に彼は激しく掻いた。

彼の傍らには、銀装飾のされた、広刃の剣。

黒い服に紅は飛び散り、彼の服は所々酸化して濃い紅に染まっている。

「 憎くて殺した訳ではない 」

娘の金色の髪が、美しすぎてしまっただけの事だ、と彼は続け様に呟いた。

彼女が安らかな顔で眠る中、彼は只剣を刺してしまっただけ。

右腕を貫き、心臓を貫いただけの事。

「 嗚呼、美しい 」

彼は自分の髪を掻く事を止めて、娘の頬を舐めまわす。

芸術品を見るようなその眼差しは、彼女を『女』として見ている訳ではない。

正にその眼は、『物』としか見ていないのだ。

有機物として視てはいない。只彼は、無機物として視ているだけなのだ。

服を引き剥がし、彼は彼女の肌を舐め回していく。

首を伝い、乳房。

乳房を伝い、上腹部。

上腹部より、下腹部。

四肢へ伝う、生温い唾液は彼女を身体をしゃぶり尽くすように。

音も無く近寄る金色の瞳を持つ青年は、男の持っていた剣を握り締め、白髪の子の心の臓を目掛け突き刺した。

娘の金色の髪に、男の血が飛び散らない様に、静かに、確実に。

「そうさ。君の言う通り、彼女は美しい。全てを知らぬ故に、美しい。けれど、君は醜い」

男を娘から引き離して、暖炉の前まで引き摺ると、青年は剣を抜いて、男の左腕に突き刺した。

左腕はびくん、と神経の反応から跳ねると、やがてどくどくと血が男の身体から溢れる。

「穢れた手で彼女に触れるなっ！」

青年はまた剣を抜いて、男の開いた口へと突き刺した。

頬は裂け、彼の顎はだらりと剥がれ落ちていく。

「穢れた舌で、彼女に舐めるなっ！」

青年はさらに剣を引き抜いて、男の両目を潰す様に突き刺す。眼球がぐじゅりと内容し切れずに溢れ出した。

彼は一層声を大きくして、言った。

「穢れた眼で、彼女を見るなっ！」

暖炉のぱちぱちという木が割れる音だけが、黙する世界を支配する。

暫くして彼は引き抜いた剣を暖炉の中へと放り投げると、娘に駆け寄って、抱き寄せた。

「嗚呼、リリア……あんな醜い男に穢されてしまっなんて……」

そう言って、青年は再び一層醜くなった男に寄って、足で男の顔を何度も、何度も踏みにじる。

「このっ、このっ！ よくもリリアを穢したなあっ！ このっ、このっ！ よくも僕の姉を、穢したなあっ！」

ぐちゃ、ぐちゃ、と肉が四散する音が、繰り返し等間隔で鳴る。最早それすら鳴る事も無く、顔は原型すらも留めていない状態になると、青年は漸く足を止めた。

金色の髪は汗に濡れながら、何度も何度も揺れた。

「リリア……僕が必ず、なんとかしてあげるからね」

そう言って、青年はリリアを抱き上げて、音もなく、その部屋を去った。

一話 スーマンとダニーの名推理

暖炉の火が消え、朝日がカーテンの隙間から射し込む時に、コートを着た赤毛の男は、無惨に殺された男の服を調べている。

「スーマン！ 何をしているっ！」

男はその怒鳴り声に身体を本能的に跳ね上がらせた。

スーマンと呼ばれたその男は、頼りなさ気な顔で、男の胸ポケットから取り出した革の手帳を取り出す。

弱々しく笑うと、彼はその手帳をビニール袋に入れた。

「無闇に触るなど、あれ程言っているだろうが！」

「どうせ調べるんですから後にも先にも同じですって……」

小太りした身長がやや低い男は偉そうにとぶつくさ言いながら、丸眼鏡で手帳をじろじろと眺めた。

「その手帳、ルド・ハミルトンって表紙に書いてますけど、翻訳家さんか小説家さんですかねえ」

赤毛の男は手帳を指差して、表紙の手書きと思われる名前に注目した。

何故わかる？ と強く怒鳴る様に聞いた。

「だつてえ、その字綺麗じゃないですか。きっと美術関係の人ですよ」

「そんなモン字で判断するなっ！ 俺の字が汚いって事かっ!？」

「ああん!？」

誰もそうとはぐと気弱そうに反論していると、彼は木椅子の血に気付いた。

「ダニーさん、可笑しいと思いませんか？」

「あん？ 何がだ」

赤毛の男は木椅子に近付いて、血の付着をよく調べる。

小太りした男が、それを気にして、その木椅子に近付いて、赤毛の男とは逆側から木椅子を覗いた。

「この血の付き方、座っていて刺されたって感じですよ。しかも右側をです」

木椅子には血が右側にはかかっているのだが、左側にはかかっていない。彼はここに着目した。

「あの男は左腕を切断されていましたが、それ以外に損傷はありません。血の落ち様からしてもこれは腕がぼとりと落ちたような大きな傷ではないですよ。そして彼の右側に損傷はありませんでした」

スーマンとダニーは、顔を見合わせた。

「こいつあ、被害者は複数じゃあねえのか!？」

「ええ、そうです。加害者が誰かはわかりませんが、殺害した凶器は恐らく……」

赤毛の男、スーマンは男の右側にある暖炉の灰を漁る。

「この灰、積もり方がおかしいんですね。……あつた!」

彼は暖炉の中から、灰を被った剣を取り出して、ダニーに見せた。

「ウォッキー！ これを鑑識にまわせ！」

スーマンは剣を入れる手頃なゴミ袋を手に、剣を柄から放り込んだ。

ウォッキーと呼ばれた人生全て放棄していそうなやる気のない猫背の刑事はそれと手帳を受け取ると、ずぶずぶのズボンを着ているかのように、ゆっくりと足を進めて出て行く。

「あんニヤロウ、人生全部放棄してんじゃねえだろうなっ！」

「ウォッキーはあれでも一番人生楽しんでますから大丈夫ですよ。それよりこの死体、駄目ですね。暖炉の近くで放置されてたのもあって痛みすぎて正確な情報が出ませんよ」

スーマンは、男の心臓を見ると、気持ち悪そうに手を掃うと、再び木椅子を見て彼は思った。

「こここの家に住んでいたのは、ユラン＝ルカナン、18歳。リリア＝ルカナン、19歳。姉弟ですよね」

ダニーが偉そうに頷くと、スーマンはここからは自分の推測です、と宣告して語り始めた。

「18歳の男性にしては、その死体は随分と老けています。手帳の事もありますし、これをユランとしないとして。ユランカリリアがこの椅子で刺されたとしたらどうでしょう」

「いいねえ。お前妄想小説家になれ。売れるぞ」

ダニーはスーマンの肩を叩くと、スーマンの首に腕を巻きつけて
部屋を出た。

二話 街角のベンチにて

茜色に染まった街角のベンチで座っているスーマンに、ダニーはホットドッグをひとつ手渡した。

ホットドッグにがぶり付きながら、ダニーは言った。

「ほふ……お前の推理はあり得るが、刑事はあらゆる可能性を探る必要性があんだ。最初にその推理で第一印象をキメちまったら、疑う奴も疑えないって事だ。わかったか？」

「つまり、確証のない推理はやめろって事ですね」

「そうだ。スーマン。新人はなんだかんだでよく目が利いてくれていいが、推理は早とちりすんじゃねえぞ」

ほくほくとしているホットドッグにスーマンはがぶりつくど、頷いた。

「けれどダニーさん。ユランかりリア、どっちかが生きている可能性は高いと思いますよ」

「話を聞いてなかったのか？ それも可能性のひとつでしかないってんだ」

ダニーはそう言って、スーマンの頭を小突いた。

「とりあえず、アンジェラがそろそろ指紋鑑定まで済ませているだろつよ」

その言葉にスーマンはえっと驚きの声をあげる。

「もうそこまできてるんですかっ!?!? まだ半日しか経ってませ

んよ」

まあ、アンジェラなら有り得るか、と、彼は再びホットドッグにがぶりついたその時。

「兄さん、オルゴールはどうだい？」

と、ベンチの裏から茶髪の青年は手乗りサイズの小さな宝箱を開けて鳴らしてみせた。

「フン、そんなちやっちいモンはいら」

ダニーのあしらう様な声を外に、スーマンは凄いな、とオルゴールを覗き込んだ。

「これ、君が作ったのかい？ よくできてるよ」

やや興奮気味に、スーマンはオルゴールを手にとった。

おい、とダニーは呆れた様に声をかけるが、スーマンはオルゴールのピンを事細かに触れていつている。

「こんな小さな箱に21本ものピンが入ってるなんて、凄いなあ。いくらだい？」

「御代はいらないよ。あんたが興味を持ってくれたならそれはもう御代は戴いているのさ」

茶髪の青年は茶色の瞳を輝かせて、笑ってみせた。

スーマンはオルゴールの底を見る。

オルゴールの底にはこう書かれていた。

『12進数 13は?』と。

「チャーリーが僕を呼んでいるから、僕はこれで失礼するよ」

青年が颯爽と走り去る中、スーマンは後頭部に鈍い痛みを感じた。

「スーマン！ さっさと行くぞ！」

ダニーの拳骨がスーマンの後頭部に飛んできた事を理解すると、スーマンはいい、と言って苛立って歩いているダニーにそそくさと付いて行った。

三話 荒ぶるアンジェラ

清楚な棚がいくつも並び、パソコン一式と電話一台が置かれたその部屋で、紅髪の彼女は苛立っていた。ダニーの闊歩する音が聞こえてくると、彼女は安全ピンで留められた書類を右手に持って、構えた。

紅い髪の鑑識は、スーマン達が入ってくるなりいきなりダニーに書類を投げ渡し、出て行った。

「遅いわよ、バカ」

スーマンはたじろぐような仕草をとると、ごめんと呟く。

暫くして書類を見ているダニーが、スーマンににやりと笑いながら言った。

「お前の言う可能性もちょっとは上がったってもんだ」

そう言われてスーマンもその書類の二頁を見た。

男の名前は、ルド＝ハミルトン。36歳。職業は小説家。三日前より、切を守らず編集者が会いに行った所、行方を晦ましていた。

娘のルナに電話で聞いた所、ルカーン家とは全く関連性も無いという。

文章書いたのウォッキーだな、とスーマンは呟くととりあえず疑問を考えてみた。

「どうしてルド＝ハミルトンは全く縁も無いルカーン家に行ったんでしょうか。今の調査段階では彼等が接触していた可能性はわかりませんけど……」

「どちらの可能性もあるな。他にも、ルドを殺す為の工作、とも考

えられるんじゃないか？ あの男の死体が暖炉の前においてあつて死体は痛んでた。死後時差を隠す為とも考えられる」

ダニーは書類を置くと、スーマンにその書類をじっくり見ておけと言って、ドアを開けた。

「ダニーさんは？」

「アンジェラの相手をしてくらあ」

と、ため息を吐きながらも外へ出て行く。

暫くして、スーマンは書類を手にとると、気怠そうな眼差しで書類を読み直す事にした。

「 13人の儀式だね？」

と、茶髪の青年は木陰にいる金色の瞳を持つ青年に問う。

茶髪の青年は近くにあったベンチに腰掛けると、眠たそうに欠伸をした。

「13人の儀式は、13人、過剰とも言える歪んだコンプレックスを持つ者を殺す事で、愛する者を蘇生する儀式と聞いた事がある。お前なら知っているんだろっ、トム」

金瞳の青年はトムと呼ばれた青年を睨む。

トムは軽くああ、と答えて、続けて説明した。

「13人の儀式は、過剰なコンプレックスを持つ者を一人殺してから、普通の人を殺さずに13人死ねばいい儀式だね。君はもう一人目を殺してしまっているから始まっているんだろっ。この儀式は君の人生で一度しかできないし、覚悟がなければならぬ。そして1

3人を超える数を死なせてはいけない。これが条件だよ。払う代償の覚悟をしておいてね」

にっこりとトムは笑うと、金瞳の青年にオルゴールを投げ渡した。銭別だよ、と言って、彼は笑った。

四話 ダニーとアンジェラ

演習場の様な広い間取りの部屋。紅髪の女はダニーを投げ飛ばした。

「いてて、アンジェラ、もうちょっと加減をしてくれたっていいんじゃないねえか!？」

「武術に手加減は必要ないわ。立ちなさい」

ダニーが起き上がると、アンジェラの手はしなやかにダニーを吹き飛ばす。

受け止める姿勢で挑んだダニーを見て、追撃を仕掛ける様にアンジェラは走り出した。

「そもそも遅いのよ！ 来るのが遅すぎて練習が遅れたじゃない！」
「おめえは強いがちょっと武道にこだわり過ぎてんじゃないのか」

アンジェラの回し蹴りをかわすと、ダニーはアンジェラの髪を掴んで頭突きをかました。

「武道つてのが全て正しいと思ってんじゃないだろうな」

頭突きによるめくアンジェラの胸衣を掴んで、ダニーはアンジェラを引き寄せて後ろ回し蹴りをかます。

だが、アンジェラはそれを受けても怯まなかった。

「……力が無い奴に、正義を騙る資格すら無いのよ」

ダニーの胸倉を掴んで、彼女は自分の服を掴まれたままダニーを

こかす。

その衝撃でダニーは手を離してしまい、彼女を放してしまった。

「力が無ければ、それは只吠えるだけの負け犬なの」

「そりゃあ違うぜ。正義つてのはな、力を振るう事が、正義なんじやねえ。もつと解りにくいもんなんだ」

ダニーが立ち上がると、彼女は掴んだ手をそのままにしてダニーを投げた。

何度投げられても立ち上がるダニー。

「再び、訊いてやる。武道が、正義だとも言うのか？」

「そうよ」

「ならその力、蹴落とす為に使うんじゃないやねえ。守る為に使え」

今度はダニーがアンジェラの胸倉を掴んで、投げた。

「……解らないわ」

「いずれ分かるさ」

ダニーはにやりと不敵の笑みを浮かべた。

五話 冷たい娘 ルナ

街中、小さなカントリー風の家。

スーマンは玄関についているインターフォンを鳴らす。

はい？ と可愛らしい声が聞こえてくると、スーマンはお父さんの事でちよつと。と用件を言う。

がちやりと開いたチェーンがついたドアから姿を見せたのは、銀色の童のような髪、そして珍しい銀色の瞳を持つ美しい娘だった。

彼女は顔を傾げて、どなた？ とスーマンに問う。

スーマンが警察の手帳を出すと、彼女はどうぞとドアのチェーンをはずした。

彼女は椅子に腰掛けると、ふう、と鬱蒼とした溜め息を一つ。

「またあの変態の話ですか。つくづく警察は愚かしいですね」

「変態つて……貴女のお父様では？」

変態は変態です。と彼女は吐き捨てる様に言って、スーマンの前に紅茶が並々と入ったカップを置いた。

「変態。変人。狂人。下種。クズ。……さて、他にどんな言葉があるんでしょうね」

冷たい笑顔で、彼女は父を侮辱する。

スーマンは少し怖気付いたのか、紅茶に口をつけて、すぐに置いた。

「お父様は、どんな小説を書いていたんですか？」

「あの変態はたった一冊しか書いていませんわ。『美しき我が人形』という本しか。変態らしい、描写もよくわからない狂った物ですわ。」

貴方も愚かより変態になりたくないというのなら読まない方が宜しいでしょう」

彼女は自分のティーカップに紅茶を注ぐと、落ち着いた様子で茶を啜った。

「あの、何故変態なんですか？」

スーマンの質問に、彼女は手を止めた。

彼女はその銀色の瞳で、スーマンを真っ直ぐ見つめた。

「実に簡単な答えよ」

そう言っつて、彼女は再び手を動かし、カップを机に置いた。

「あの、貴女のお名前は？」

「ルナ、ルナハミルトンよ」

彼女は少し戸惑うような様子を見せたが、すぐに気丈な振る舞いへと戻した。

スーマンは立ち上がって一礼すると、玄関へと向かう。

「では、ルナさん。色々をお話をありがとうございます」

「ええ、今度はどうぞプライベートで来てください。美味しいお茶を注いであげますから」

作り物のような笑みをスーマンに向けて、彼女はドアを閉め、鍵をかけた。

スーマンはどうしても、彼女に好意を持つ事ができなかった。冷たいのだ。あまりにも。

「……実の父親が死んで生活苦にも陥る筈なのに、彼女は何故あそこまで焦る事も無く冷静なのか、僕はそう気になったんです」

パイプ椅子に腰掛けたダニーの背中に、湿布を張りながらスーマンはそう言った。

その言葉にダニーは興味深そうに聞いた。

「ほほう、つまり、新たな可能性を見つけたって事か？」

「ええ、そうです。彼女も容疑者の範囲内として考えていいと思います」

スーマンは闊歩しつつ、ルナ・ハミルトンの書類を見ている。

その書類はどうしたとダニーが問うと、彼は、

「ウォッキーマンが予め調べていたんです。どうやら彼も電話越しからでも怪しいと思ったんでしょう」

ルナ・ハミルトン、17歳。常に品行方正、彼女を慕う者も多い。だが彼女の友は学生達は皆口を揃えて知らないという。

スーマンは自分が感じたその冷たい感覚は、実にそのままだったのだ。彼女は、見下している。

「ダニーさん、彼女は犯人かも知れませんが、やはり可能性の一つではないんでしょうか」

「そりゃあ、おめえが感じたその違和感ってのがキイだろうよ」

そう言ってダニーはビー玉を人差し指と親指で掴んで、じいっと見ている。

「また趣味のビー玉眺めですか。よくわからない趣味ですね」

「ばーろっおまってめっこりゃ俺の趣味なんだ。口出すんじゃないねえ！」

はいはい、と軽くスーマンは相づちを打つと、アンジェラの事を思い出した。

彼は闊歩を止めて、ダニーに振り返って訊いた。

「ダニーさん、アンジェラはまだ怒ってます？」

「いんや、怒っちゃいねえさ。なんだ？ エスコートでもしたかったか？」

「どこまでが冗談ですか？ いや、あの人からお金返してもらってないんですよ」

ダニーは呆れた様にスーマンを怒鳴った。

「男がちゃっちい事でうだうだ言ってるじゃねえ！」

「今日が返済する日だったんですってば……、まあ、行ってきます」

スーマンはそう言って、足早に部屋を出る。

「やれやれだな」

ダニーはあほらしいと言わんばかりの顔で、さっき置かれたルナ
ハミルトンの書類を見る。

銀色の髪の子女の写真はまるで作り物のような笑顔で、何か気持ち悪い感覚に彼は襲われた。

六話 アンジェラと金色の瞳を持つ青年

暗い夜道、人通りの少ない真冬の寒さ。

そんな中、紅髪の女 アンジェラはダニーに言われた言葉の意味を深く考え込んでいた。

黒いフードを被った者が、金色の瞳を覗かせながら、静かにアンジェラへと後ろから近付いていく。

銀色のナイフが、アンジェラに刺さろうとした、その時。

鋭い後ろ回し蹴りが黒いフードを被った者を蹴り飛ばした。

「殺気が隠せていない時点で、あんたは私にやられる事が確実に決まっている」

金色の髪を揺らしながら、彼はアンジェラの言葉に、より一層殺気を表した。

右手に握り締めた銀のナイフをアンジェラに投げつけると、アンジェラはそれをも容易くかわす。

その時、銃声と共に彼女の身体を強い衝撃が奔った。

「人は脆いんだ」

彼は立ち上がると、風穴の開いて、苦痛に悶えるアンジェラに、彼は再び、拳銃を放った。

「ち……くしょうっ……」

アンジェラは、左腕で彼の足を掴む。

彼は掴まれた腕に拳銃を間近にして、また、銃声を鳴らした。

「自分達が造った道具に勝てるのは、誰一人としていないのさ」

そう吐き捨てる様に言つて、青年は高らかに笑つた。

笑い声と共に薄れゆく意識の中、最期にアンジェラは理解した。

力が、正義ではない。正義とは、胸の内にある、強く曲げない意志だったのだ。と。

翌朝、彼女に触れたのは、スーマンという刑事が最初だった。

七話 銃痕の遺した答え

「アンジェラ……犯人は、誰なんだ」

ダニーはそんなスーマンに近付いて、肩に手を置いた。

無言で佇むスーマンに、ダニーは何も言えずに、黙々とスーマンを待つしかなかった。

「そうか！ 銃痕だ！」

スーマンはアンジェラの吹き飛ばされた腕の付け根付近を探し回る。

コンクリートの地面についた銃痕を見つけるには、そう時間もかからず、彼はダニーに細い端子を鑑識に借りてくる様に頼んだ。

ダニーは鑑識から端子を借りると、スーマンに手渡した。

「おい、スーマン！ 銃弾見つけてどうすんだ？」

「銃弾があれば銃は大抵は特定できますよ。後はその銃を探せばいい」

「いや、その銃ってのはゴミ箱にあったよ」

スーマンの手が止まり、ダニーは溜め息を吐いた。

「さっきあそこのゴミ箱に捨てられていたモンが見つかったらしい。使い捨てとして使っていたみたいだな」

ダニーはビニール袋に入った銃を見せた。

スーマンは弾丸を取り出すと、その銃の銃口と重ねて確認した。

「……確かにそうみたいですね。指紋は残っているんでしょうか」
「それは鑑識に回してからだな」

そう言っつて、ダニーはビニール袋をスーマンに手渡した。
彼はビニール袋を受け取ると、弾丸をビニール袋に入れて口を閉じた。

彼は怒りを込めて、銃弾を睨みつけるが、暫くするとウオッキーがそれを渡す様に催促して、ウオッキーに渡す。

「そうか。わかった」

ダニーは内線電話を切ると、スーマンに銃の指紋が判別したぞと声をかける。

パイプ椅子に腰掛けているスーマンは顔をあげて、誰のですかと問う。

「それがだ。なんと、ルド・ハミルトンが殺された時、剣についていた指紋と同じだと判別されたらしい」

啞然とした様子で、彼は口をぽっかりと空けた。

暫くして、彼は本当、ですか？ とダニーに問う。

ダニーは頷いた。

「じゃあ、之は連続殺人だとも？」

「その可能性が出てきた。全て偽装かもしれんがな」

ダニーはそう言っつて、訝しげな顔をした。

彼は立ち上がったって、ドアを開ける。

「ですが謎も残っています。何故犯人はアンジェラを狙ったのか」

スーマンはそう言って、足早に部屋を飛び出た。
ダニーもスーマンを追いかける様に部屋を出た。

「ルカーン姉弟は、ここで住んでいたんですから、食器から指紋が出る筈です」

そう言って、スーマンはあの最初の殺人があつた部屋の机にあるコップをビニール袋に放り込んで、もう一つ大きめに薪を入れた木箱を入れた。

「そのコップは誰かなりの指紋がついている筈です。そしてもう一つ、この箱はユランが運んだ物でしょう。か弱い姉に運ばせる訳にはいけませんからね。きっと自分で運んできたんですから指紋が判別できる筈です」

そう言って、スーマンはその二つをダニーに渡した。
鑑識に回してください、と彼は言うと、彼は再び部屋を飛び出た。

「ルカーンハミルトンにプライベートで会ってきますす！」

そう言い残して、彼は颯爽と走り去っていった。
ダニーは不満そうに、二つのビニール袋を持って、重々しく足を運んだ。

八話 ルナとスーマン

銀色髪の娘、ルナは紅茶を啜りながら、スーマンの話を聞いていた。

アンジェラが殺害された事件と、ルド＝ハミルトンの一件の関連性を。

「勿論、これはプライベートでの質問で、僕が知りたいだけなんです」

「知りませんね。あの変態はそんな蛮族の如き女に関わるとは思えません。そんな事も理解できないのかしら」

頼りなさ気に笑うスーマンに、ルナはふう、と溜め息を吐いて立ち上がった。

「どういう意味で変態か、という事をもっと詳しく教えてあげましよう」

こちらへ、と彼女はスーマンの手を引いてリビングを出て二階へと足を進めた。

二階にあがって、一つ目のドアの前で立ち止まった。

「あれは、私を『娘』として考えなかった。私があまりに美しすぎてしまった故に、あれは『人』を『物』としか思えなくなった。という事です」

娘はドアを開いて、荒れた絵画部屋を見せた。

最後に画かれたと思われるそのキャンパスには、肌の綺麗な、銀色の髪がばっさりと切られた彼女が縛られたデッサンが描かれてい

た。

「お父様に、虐待を？」

スーマンの言葉に、ルナは首を横に振った。

「虐待、ではありません。屈辱でも、ありません。犯された訳でもなく、只あれは私の絵を描いて、小説を書き上げただけの話です。私が美しすぎた所為で、そうなったのです。ですがあれも飽きたのでしょうかね」

そう言っつて、机に置かれた原稿に手を置いて、彼女は冷たい笑みを浮かべて、いつしか私では満足しなくなった、と冷たく言った。

「そして四日前、忽然と姿を消して新しい美女を探しに行ったのでしょうか。そして、きっとあれはそれを見たのでしょうか」

彼女は清々とした顔でスーマンに視線を戻した。

スーマンは何を言っつていいのか、わからなかった。

「愚者が、憐みの花束でも差し向けてくれるのですか？ そんな物は必要ありません」

「貴女は、お父様を愛していたんですか？」

彼女はくすりと笑うと、スーマンに微笑んで言った。

「いいえ全然。あれを愛す必要性も必然性もないですから。愛せと言っつなら貴方を愛した方がまだマシでしょうね」

きよとんとした顔でスーマンは少し反応を忘れてしまうと、彼女はすぐさま近付いて銀色の瞳でスーマンを覗き込んだ。

「心配に及ばないです。私は貴方を愛さないでしょうから。 あ
れは、さぞ醜い死に方をしたのでしょう?」

彼女は首を傾げて訊いた。

スーマンは頷くと、彼女はふふ、と笑ってスーマンの身体に抱き
ついた。

足を絡め、振り解けぬ様にしっかりと身体を重ねて 彼女は言
った。

「貴方も、醜い死に方をしてみたいですか?」

「 貴女は、そんな事をする気は全く無いでしょう」

そう言つて、スーマンは身を預けてみせた。

彼女は無邪気に笑つて、絡めた身体を自ら振り解いた。

「貴方は少し理性が強いみたいですね。愚者としては中々良好です
よ。けれど、貴方は二つの事件がどこで繋がっているのか、理解で
きていない事が、愚かですね」

彼女はくすくすと笑つて、机に座つて足を伸ばす。

スーマンはその言葉に、どういう事かと問う。

「本当に愚かなのですね。いいでしょう。教えてあげます。貴方の
知ってるアンジェラという女は武術に過剰な迄に執着していて、貴
方達が来た瞬間に部屋を出て行って、練習していたのでしょうか?
それ程までの過剰な執着、としたらあれと同じ部分が見えて来ませ
んか?」

彼女はスーマンに大きくヒントを与え、暫くしても答えの出ない

スーマンを見てくすくすと笑った。

「そう、もし『犯人が同一』と断定するのなら、それは殺人鬼か、または、その共通点によつての連続殺人です。貴方が知らない一点は、その共通点の部分なのでしょう？　では、あれの事件。あの変態は私に何をしましたか？」

「美の追求によつて小説を書く……？」

そうです、と彼女は相づちを打つと、スーマンを指差して言った。

「過剰な執着ですよ」

「……え？」

「あの変態は美に過剰な執着を、そしてその殺されてしまった女は、武術　力に過剰な執着を持っていた。ではないでしょうか？」

そう言われて、スーマンは気付いた。

彼等の、実に奇妙で、奇怪な共通点。あまりに曖昧でわからない、その共通点に。

「ただ、あの変態と共に殺されていたと思われるもう一人の被害者がどうかは、残念ながら私は存じ上げません。ですから、そこまでは予想できません。それでも、貴方の説明が実に事細かで、彼女の性格等も含まれていた為に私はこの答えに辿り着きました。ありがとうございます」

それはこちらの言う台詞だ、とスーマンも彼女にお辞儀をした。

「さて、お腹が空いたでしょう？　どうですか？　ランチでも」

と、彼女はスーマンの手を引いた。

楽しそうにする彼女に、少しスーマンはときめいてしまった。

九話 喫茶『ラ・シャンロ』

「この喫茶店は、味はいいんです」

彼女が案内したのは、実質徒歩に一分ともかからぬ隣家のまた隣家のまた隣家にあたる、喫茶『ラ・シャンロ』という喫茶店だった。スーマンは喫茶店なのに美味しいのか、とやや偏見気味な疑問符を抱きながらも、先程の礼もあるし彼女の言葉にとりあえず従おうと思った。

「いらつしゃい」

「こんにちは。ジエイク。もう夕暮れ時だから、こんばんは。ですか？」

ルナはそう言って、席へとつく。スーマンもつられてルナの隣に腰掛けると、黒い髪を後ろに束ね括った男は、すんなりとした腕で、淹れたてのコーヒーを持ってきて一杯、二人に差し出した。

「注文は？」

「トマトとレタスのパスタがいいわ」

「畏まりました」

そちらの方は？　と言わんばかりの表情で、彼はスーマンをじっと見る。

僕も同じで、と気弱そうにスーマンは答えて、彼は畏まりましたと再び告げた。

「ジエイクは、味に究極の美を求めている人なんです」

彼女はそう言って、コーヒーを啜って、ほっとした様に肩を落とした。

スーマンもつられてコーヒーを飲む。

「美味しい」

今までの偏見を崩す様な美味しさに、彼は感嘆の声をあげた。

ルナはにっこりとした顔でスーマンにどうだといわんばかりの顔で彼を眺めていた。

「う………すみません。負けました」

「いいんです。偏見で塗り固めるのは愚者の特権でしょう」

「そういえば、その愚者というのは一体なんなんですか？」

ルナはきよとんとした顔をして、暫くしてスーマンを指差した。

「考えがそこまで行かない時点で貴方は愚者なんです。愚かだと気付けない間は愚者なんですよ」

「凄くよくわかりませんが、要するに何気に酷い事を言われているという事だけはわかりました」

スーマンがふうと溜め息を吐くと、自分の背後から何だか凄い人だなあって思ったでしょ。と声がした。

自分の背後 後ろの席には帽子の隙間から見える銀髪の髪の少年がいた。

「やあ。僕はローリー＝コーナーだ。宜しく。あ、変な奴が来たなと思ったでしょ。その通りだよ。僕はそんな人なのさ」

「まあ当たってるからいいとして、僕はスーマン、スーマン＝クリ

ストフだ。刑事をしているんだ。よろしく」

「へえ刑事！ それはきつと悲しい職業なんだね！」

え？ とスーマンはローリーと名乗った少年に聞き返した。

ローリーはこう答えた。

「だって、悲しい事があつたんだらう？ 君の顔にそう書いてあるじゃないか！」

「ローリー。君はそんな事がわかるのかい？」

「ああわかるさ！ 何故かって？ 僕は自分の心より他人の心に興味があるんだ！ 当然さ！」

ルナはローリーを睨むと、スーマンに呼びかけた。

「コーヒーが冷めてしまいます。早く飲んでください。コーヒーの風味が落ちてしまいます」

彼女が冷たく言い放つと、ローリーは引っ込んだ。

スーマンは慌ててコーヒーを飲み干すと、ふう、と再び溜め息を吐いた。

「それから、間違いで無ければ殺人は今日の夜に再び起きるかもしれませんね」

ルナの言葉に、彼は疑問符を抱く。彼が何故、わかるのかと訊くと、彼女は、

「あの変態が死んだ時を一昨日の夜とすると、昨日の夜に殺されたのはアンジェラさん。なら、今日も殺される可能性が高くなると思いますから」

そう言って彼女はコーヒーを啜った。

スーマンは思った。何故そこまで理解できるのか。彼女は憶測上実にシンプルな結論しか言っていないというのに、まるで全てが合っている様な自信が彼女には見える。

何故、彼女は、解るのだろうか。

「あえて疑問符を解く言葉を言うなら、そうですね。貴方がくれた現場の情報によって二回目の殺人から急いでいる様にしか思えませんが。ああ、勿論私も犯人は別々だと思ってみましたよ。そう、確証はまだなのです。三回目の殺人が起こるまでは私の憶測の域を超える事は無いでしょう。ですが私は愚かな警察達とは違って、あら、ジェイク。今日はまた一段と美味しそうですね」

彼女が真顔で語っていると、ジェイクは美味しそうなパスタを皿に盛ってスーマンとルナの前に置いた。

ルナはにこやかに言うと、フォークでパスタを巻きつけた。

スーマンも同じ様にして、口の中へとパスタを放り込む。

「美味しいです。シンプルな味付けなのに、全て適度だから凄く美味しいんですね」

「っ」

ジェイクは嬉しかったのか、息を呑んで厨房に戻る。

ルナはくすくすと笑いながら、スーマンの頬についているトマトソースをナプキンで拭いた。

「ジェイクは褒められると気をよくしちやいすぎるんですよ。気にしないでください」

「は、はあ……。そういえばルナさんは何故憶測の域から出ない推

測に自信が持てるんですか？」

その質問にルナは一度手を止めて、口元をナプキンで拭いた。

「自信が無ければ語れない。間違っていたら間違っていました。たったその一言でいいんです」

そう言っつて、彼女は再びパスタに口をつけた。

屋外の公園で、金色の瞳の青年は、白髪の老人と談笑している。夕暮れ時に彼は、紳士的に問う。

「次に誰を殺せばいいんでしょうか？」

と。白髪の老人はその問いに、『喫茶ラ・シャンロ』とキイワードを遺して、立ち上がった。

「……あえて予言を繰り返すというなら、私はそれを、止めないよ……」

彼はそう言い残して、ゆっくりと去っていく。

その背中を金色の瞳は、姿が見えなくなるまでずっと観ていた。

十話 放たれた殺人鬼

ぴちよん、ぴちよん。

月並みの綺麗な水面に、紅い滴が滴り落ちる。

銀色の滑らかな長い髪の娘は、対岸の電柱に縄をつけて、男の身体を吊るし上げた。

月明かりが照らす、紅い瞳は愉悦感を感じ、震えていた。

「あはあっ」

白い吐息が色っぽく魅せる中、彼女は唾液を縄へと伝わせる。

男はいくつもの小さな掠り傷から縄で締め上げられて血を流し、唯唸る事しかできない。

「ねえ、苦しい？ ねえねえ、楽しい？」

黒いドレスに身を包み、彼女は橋の欄干で楽しそうに踊りながら、手に盛っている縄で彼を締め上げていく。

彼が彼女に出会ったのはほんに僅か、たった一瞬。店の後始末を終えて裏口から出て行った時だった。

娘と男は目が合った。ただそれだけの関係。そこに愛もなく、憎しみもない。

唯あるとすれば、彼女からの笑顔だけ。

男は知らない。彼女の名を。

「それは僕の獲物だ」

金色の瞳が、実に速くナイフを男の胸に突き立てた。

ナイフに括りつけたピアノ線を引っ張って、彼は再びそのナイフ

を手にとる。

娘は男が息絶えた時を見計らって、縄を一気に引っ張った。筋肉が千切れる音は、彼女にとって実に心地好かった。

「……邪魔をしてくれるなんて、なんて悪い仔なのかしら？ このぶちぶちとした音、嗚呼、堪らないっ！」

彼女はまるで二つの演技を織り成す様に、踊る。

実に、鋭い刃が娘の頬を掠った。

「悪い子は君さ。彼は必要だったんだ。君はそれを殺そうとした。おいたが過ぎると、思わないかい？」

金色の瞳は、実に愉しそうに彼女を視た。

開戦の鐘は、彼女の裾から出たナイフ。

鉄のぶつかる音が、静寂の世界を切り裂いた。

十一話 金色の瞳を持つ青年と赤毛の刑事

「ジエイクさん！」

新米刑事、スーマンはジエイクの後始末を手伝い、別れた後に財布を忘れた事に気付いた。

そして戻ってくると、華奢な娘が男を軽やかなステップで引き摺っていく姿を見て、追いかけたが途中で見失ってしまったのだ。

両腕をもがれた男は、眼を見開きながら、月明かりを隠す、曇天の雲を見上げて、黙したまま、何も語らなかつた。

男の瞼を瞑らせると、冷たい身体を置いて、スーマンは唯一つの使命感により、行動を起こした。

金の柄を持つナイフが、金色の髪を掠る中、彼女は見た。階段の物陰から、赤毛の男がこちらを視ている事に。

「盗み見？」

彼女は赤毛の男に裾からナイフを取り出して投げる。

男は階段を駆け上ってナイフをかわすと、彼は拳銃を胸元から取り出して、彼女に銃口を向ける。

「指名手配犯、アリシャ・ルミナス。何故ここにいるっ！」

「やあねえ、刑事さん？ あんな大きいだけの檻、抜け出せないって思ってたのぉ？」

アリシャと呼ばれた娘は嘲笑う様に刑事に言葉を返す。

「……ルド・ハミルトンの事件、アンジェラの事件もお前、なのか

「？」

金色の瞳が、刑事を睨む。

たった一瞬の、睨んだ隙にアリシヤはナイフを青年の右肩に突き立てた。

アリシヤの身体が、宙に浮く。

青年の蹴り上げは実に速く、ナイフを相打ちで刺した後、それを押し込むようにピンポイントで蹴り上げたのだ。

「やめろっ！」

物怖じする刑事は、拳銃を青年に向ける。

青年は刑事に振り向いて、笑った。

金色の短く整った髪、金色の瞳。長袖の白いシャツと群青色のジーンズ。

質素、シンプルだが綺麗な顔立ちはスーマンですら、どきりとした。

「君は殺せない。幸運だったね。過剰なまでの執着がなくて」

スーマンの顔から、血の気がすう、と引いた。

『過剰なまでの執着がなくて』、この言葉に、彼は冷静という秩序へと戻された。

導き出される答え。全ては彼の犯行だったのだと。

彼は、拳銃のトリガーを引く指に、力を込めようとする。

「君の名前は、ユラン、ユラン＝ルカナン。18歳。……そうなのか？」

「その通りだ。君が僕の事を知っているだけでは不公平だ。君は？」

妙に落ち着いた青年は、欄干にもたれ掛かってスーマンに問いかける。

「どくん、どくん、と血が滾る想いを抑えて、彼は冷静に答えた。

「スーマン、クリストフ。20歳。君が殺したアンジェラの同僚だ。さあ、これで君の方が一個多く知った。これに見合う情報を貰おうか」

青年はくすくすと笑って、君はバカだね、とスーマンを指差した。

「僕は『君が僕の事を知っているだけでは不公平だ』とは言ったけれど、『君が僕より二個多く知っているだけでは不公平だ』とは言っていないだろう？ 三つ目は君が勝手に話しただけさ。バカだね、スーマン」

そう言って、青年は欄干から離れて、スーマンの持つ拳銃を払った。

「君と僕の間になんか物はいらない。スーマン、夜明けまでまだ時間はある。少し話そうじゃないか」

青年はスーマンの左腕を引っ張って、欄干へと突き飛ばした。

そして対岸の欄干へ彼も腰掛けると、彼は何を聞きたい？ とスーマンに問いかけた。

十二話 大人と子供

「まず、君の家で起こったあの男の事件だ。君は彼を、どうやって殺した？」

「ああ、あの悪辣な変態の事か。あの下種でクズで愚かで最低な男は、リリアに手をかけたのさ。それだけじゃない。あの穢れた腕でリリアに触れて、あの穢れた眼差しでリリアを視て、あの穢れた舌で、リリアを舐めたっ！　なんて重い罪だ！　殺さなくては！　殺さなくては！　殺さなくては！　殺せ！　殺せえっ！　……あいつは、凄く、クズだったのさ」

彼は何度も足で踏み潰す動作を繰り返し、やがて足を止めて、むなしそうにスーマンに微笑んだ。

「アンジェラは、アンジェラは何故だ！」

「アンジェラが誰かは知らないけれど、チャーリーが言ったのさ。川沿いの夜の小道、冬の寒さに凍えながら考え込んでいる女性。それがアンジェラだと言っのなら、僕はアンジェラを殺したんだろう。彼女は僕に必要だった。それだけの事さ」

スーマンはぎゅっと右手で拳を作る。

先程まで静まっていた憤慨が、今再び湧き上がってくる感覚が自身でよく判る程、彼は憤っていた。

「なら、ならジェイクさんは何故だ！」

「彼も同じさ。とは言っても、あの両腕とかやったのはさっき吹き飛ばした時に逃げたあの女さ。僕の知った事じゃないね」

ぎり、とスーマンは歯を食い縛る。

殴りたい憤怒の感情を押し殺し、唯、知る為に。

「君は、何をしようとしている」

「それは極上の秘密さ。君に知る権利は無い」

青年はそう言って、声高に笑い出した。

知る権利は無い、知る権利は無い、知る権利は無い！ 何度も繰り返しながら、笑っていた。

「そう。君には彼等を殺す権利なんて無い様に、僕にも知る権利は無いんだろうね」

スーマンはそう言って、欄干から背を離す。

「君も、クズだ」

声高に笑っていた声がぴたりと止んで、青年はスーマンをじっと見た。

「人は容赦無く虫を殺すよね。容赦無く豚や牛を殺すよね。なのに人は殺せないというのは可笑しい話じゃないか」

「それは人が作ったルールの中で生きているからだ。君もそのルールを守らなければならない」

ハッ！ と彼は鼻で笑うと、にやりと笑みを浮かべた。

「それは大きく違うよスーマン。僕は国のルールなんて知った事では無いし、生き物は多種多様だ。君に合わせる必要性は無いし国に合わせる必要性も無い。何より、君達警察や国に、僕達を裁く権利なんか無い」

「ああそつだ。裁く権利は無いよ。だけどね、人は天誅を待つていたつて落ちないんだ。落ちてても偶然だ。なら人誅、天が裁かないなら同じ人が裁くしかないんだ」

スーマンは両手に握り拳を作る。

彼は青年を真つ直ぐ視て、物事を話した。

「僕達に正当性はあるか無いか、これは無いだろう。それと同時に君にも正当性は無い。僕等が言う事なんて君の対象としている世界にとつてはどうでもいい事なんだ。ほんに小さな、砂粒よりも小さな事なんだ。罪、罰、そんな観点はいらないだろう。けれど人が生きている今の世界にとつて、人は人の決めたルールに合わせて生きなきゃならない。文句があるならルールを変えてみる。それで死んだら新しいルールは間違つていたという事になる」

青年は、笑みを止めて、真顔になる。

欄干から背を離れた青年は、一步、スーマンへと近付いた。

「ぺちやくちやとほざくな。僕はルールを認めていないという話をした。何ならあの女の様にお前達の作った武器で殺してやろうか？」

赤毛の刑事は、尚それを物怖じせずと言った。

「君は僕を殺せないんだろ？ ルドゥハミルトン、アンジェラ、シユーヴァルツ、ジェイクさん。僕には彼等の様に過剰な執着が無いと言つたのは君じゃないか」

「傷付ける事はできる」

青年は、また一步步寄り寄る。

それでも彼は物怖じせず続けて言う。

「自分の主張だけを言って相手の主張を聞かないのは子供の言い分だ。自分の話に正当性を思わせたいなら、僕の話も聞け」

そう言って、彼はズいっと身体を前に出して、青年の肩に手を置いた。

「君が奪った命は、すごく、重いんだ」

「ッ！」

轟くような銃声と共にスーマンの左足に、風穴が空く。
青年の右手には、短めのショットガンが握られていた。

十三話 見えない人と負傷の刑事

スーマンは目を覚ますと、そこは警察の寮でも無ければ自宅でも無い。

白い天井、白いシート、白いカーテン。
外では子供の笑う声が聞こえる。

「目が、覚めたかね？」

スーマンの左側からの声。カーテンに遮られて見えない貫禄のある声は、痛むかね？ と問い掛けてくる。

いえ、とスーマンが答えると、見えない人はそれはよかった。と大層暖かい声で喜んだ。

「君は、随分悩んでいるようだね。先刻来た君の上司が頼られないと寂しがっていたよ」

その言葉に、スーマンは少し苦笑した。
暫くして、彼は漸く話し出した。

「……僕は、熱情に身を任せて一人で走ってしまったんです。本当ならダニーさんに、話すべきだったのに」

そう、話すべきだったんだ。スーマンは少し、歯を食い縛った。
彼は今、あの時の愚かさによる痛みを噛み締めていた。

銃弾による痛みではない。傷痕による傷みではない。唯、あの時何故頼っていなかったのか。頼っていたら捕まえられたかもしれないのに。彼は、そう自分を責めていた。

「そう、僕は犯人に意見　いえ、文句を言う為に、それだけの為に僕は、単身である青年に勝負を挑みましたっ」

スーマンはそこで黙り込んでしまった。

その様子も間も含め、見えない人は、ただ黙々と聞いていた。

暫くして、スーマンが歯を噛み締めるような音を立てると、見えない人は問い掛けた。

「後悔、しているのかね？」

その言葉に、スーマンはいと答える。

返事を聞いて、見えない人は一つ、話をしよう。と話の主導権を奪った。

「昔から人は、失敗する存在だと言われている。何故かわかるかね？」

スーマンはその問い掛けに答える事はできた。

実に簡単な、歴史のお話なのだ。

「それは、人は失敗から学ぶモノだから、ですよね」

見えない人はその通り。と言うと、語りを続けた。

「君が後悔する事は実にシンプル。簡単な事だ。だが、君はそれを失敗として、バネとしての道にするか、ただ後悔のまま終えるかは誰も決める事はできない。君にしか決める事のできない話だ。さて、君はどちらを選ぶのかね？」

その声はスーマンを落ち着かせる。

冷静になった自らが選ぶ道は、自らのみぞ知る。スーマンが選んだ道は、まずダニーに謝る事だった。

「ダニーさんに、謝ります」

そうか、と声が言うと、スーマンは再びはい、と返事した。

「そうそう、私からの忠告だ。君は実に危なっかしいから、首をよく突っ込むのだろうが、実に御節介だるうので止めた方がいい」

と言って、声の主はよいしょっ、と声をあげてベッドから降りた様子を見せた。

「では、私はそろそろ退院なのでね。帰るとしよう」

「あ、おめでとございます」

「君も早く退院できる事を祈るよ」

「はい、頑張ります！」

簡単な会話を交わすと、声の主はカーテンに映る影を供にして、ゆっくりと去っていった。

がらり、とドアがスライドされる音が聞こえてから、スーマンは身体を起こして、自分の左足の付け根部分をさすった。

ずきずきと痛む足は、しばらくは退院させないと言わんばかりの傷みで返事した。

「こりゃ、しばらくは動けないなあ……」

赤毛の刑事は、弱々しく笑って見せた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9185n/>

愛する者 愛される者 ~一幕~

2010年10月17日13時46分発行